



2024
No.
135

contents

企画展	石山寺 P1～P3
コラム	源氏供養と石山寺 P4～P5
収蔵品紹介	塚四郎旧蔵資料 P6 (観光案内・地図等)



大津市歴史博物館

令和6年9月3日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

企画展 **石山寺** —密教と観音の聖地—

会期：令和6年10月12日(土)～11月24日(日)



【図1】重要文化財 石山寺縁起絵巻 巻1 鎌倉時代 石山寺蔵

大河ドラマに登場した石山寺

皆さんは大河ドラマ「光る君へ」をご覧になっていますか？『源氏物語』を執筆したことで知られる紫式部を主人公としたストーリーで、大津に関係するトピックも登場し、物語を盛り上げています。そのひとつが東寺真言宗の大本山石山寺です。

平安時代には、石山寺本尊の観音像が靈驗あらたかな

仏さまとして都の貴族たちを中心に信仰を集めたことから、石山寺に参詣する「石山詣」が流行しました。「石山詣」は、女性文学者たちからの人気が高く、『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母や、『更級日記』の作者菅原孝標女も石山寺に参籠したと伝わります。

このような背景から、紫式部が石山寺参籠中に『源氏物語』の着想を得たという伝説が生まれ、石山寺は紫式部ゆかりの文学の寺院として知られることになったのです。

石山寺は『源氏物語』だけじゃない！

大河ドラマをきっかけに、石山寺がこれまで以上に注目されている中、当館では、企画展「石山寺—密教と観音の聖地—」を10月12日(土)から11月24日(日)までの会期で開催します。

本展では、石山寺が持つ『源氏物語』や紫式部以外の側面を取り上げる予定です。『源氏物語』や紫式部は、石山寺を語るうえで欠かせませんが、その他にも重要なトピックがたくさんあります。大河ドラマをきっかけとして石山寺に興味を持った方に、寺院の歴史や優れた仏像・仏画・聖教類などについてもご紹介したいという思いから、本展では貴重な寺宝を一堂に集め、石山寺の歴史と仏教文化をくわしく解説します。

今回の展博日よりでは、その中でも特に注目の作品をご紹介します。

石山寺の歴史の決定版「石山寺縁起絵巻」

展示の目玉のひとつは、重要文化財「石山寺縁起絵巻」全7巻を、全巻公開することです。この縁起絵巻は、鎌倉時代・正中年間(1324～1326)に制作が始められたとされ、東大寺初代別当の良弁僧正(689～774)による奈良時代の開創伝説から描き起こす、石山寺の歴史をまとめた決定版ともいえます。また、巻1から巻3は、鎌倉時代の宮廷画師・高階派が手掛けたもので、当時最高峰の画技を知ることができるのに加え、貴族から庶民に至る生活史をうかがう材料としても、とても貴重な絵巻物なのです。

図1は、石山寺の造営中に巨大な宝鐸が出土し、石山が聖なる地であることが明らかになるという場面です。宝鐸を見る人々の驚きや、木材を引く人々の躍動感が伝わり、いまにも動き出しそうな感覚すら覚えます。この明るく屈託のない人物表現が、本図の大きな魅力といえるでしょう。

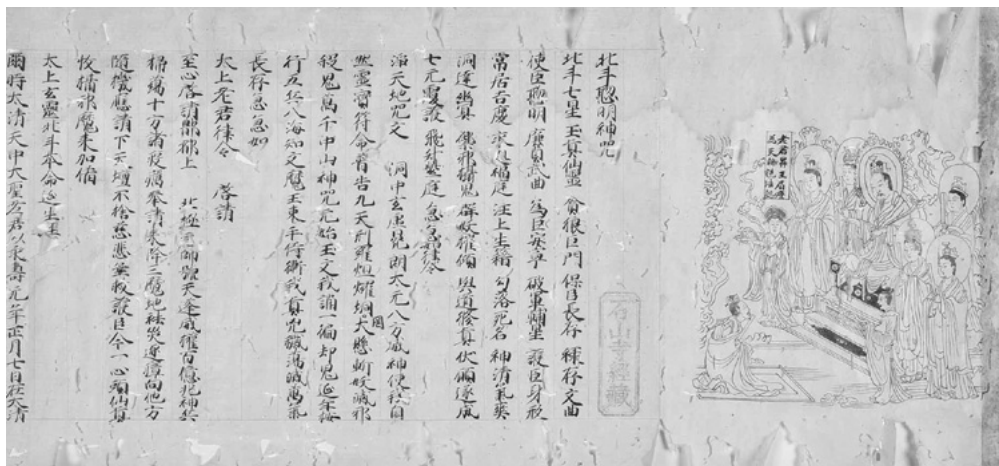
「石山寺縁起絵巻」が全巻公開されるのは、2012年以来、実に12年ぶりのこととなります。登場人物たちのユーモラスな表情や、活気あふれる市井の人々の生活を、ぜひ体感してみてください。

寺院なのに道教？「北斗惣明神咒」

良弁僧正が創建にかかわったとされることからわかるように、東大寺と関係の深い寺院として始まった石山寺。平安時代に入ると、淳祐内供(890～953)の入寺などを契機に真言密教の影響を受け、多くの学僧が修学に励む学問の寺院として隆盛しました。石山寺には、仏教經典を集成した「石山寺一切經」や、平安時代に活躍した朗澄律師(1132～1209)が書写した典籍を中心とした「校倉聖教」など、歴代の僧侶たちの研鑽の証が残っています。

これらの聖教類はあまりに膨大なので、目録などでその存在がわかっているにもかかわらず、わずかな研究者しかその内容を知らないものがたくさん含まれています。本展では、これらの聖教類の一部を初公開します。その内のひとつが「校倉聖教」のうち「北斗惣明神咒」(図2・3)です。

この作品は、卷子装で「北斗惣明神咒」と題名がついていますが、内容は中国・宋(960～1279)には



【図2】重要文化財 北斗惣明神咒(校倉聖教のうち) 平安時代 石山寺蔵



【図3】同部分(北斗七星像)

成立していた『^{たいじょうげんれいほくとほんみょうえんせいきょう}太上玄霊北斗本命延生経』という道教経典を記しています。このお経は、北斗七星に生命を延ばし、災厄を除去する力があると説きます。奥書には「末資観祐本」とあり、12世紀の石山寺僧・観祐（生没年不詳）の所持本であったことがわかります。平安後期には、星にまつわる^{しゅほう}修法が貴族の間で流行したため、僧侶たちは仏教だけでなく、道教における星に関する信仰を知っておく必要がありました。だからこそ、観祐は道教経典である本書を手に入れて、研究していたのでしょう。

また、本書には、中ほどに北斗七星像があり、みな笏を執る女性形で描かれます。平安時代にさかのぼる北斗七星像は極めて珍しく、貴重な作例です。実は、本書は11世紀に建立された中国・江西省^{かい}贛州の慈雲寺塔跡から近年出土した北斗七星図と近い姿をしています。つまり、当時の中国における最先端の経典と図像を収集しようという、観祐の姿勢をうかがうことができるのです。

本展では、このほかにも石山寺僧の学問への真摯な努力を感じられる初公開の聖教類を多数展示する予定です。

慶派仏師の作か？「不動明王立像」

当館では、本展にあわせて石山寺山内の仏像調査を行い、新たに中世の制作と判明した仏像があります。「不動明王立像」(図4)はそのうちの一例です。

深く自然に刻まれた衣文などは鎌倉時代の特徴ですが、平らな^{けんぱつ}巻髪などは平安時代に多い要素なので、本像は平安時代の要素を残しつつ鎌倉時代に造られたと考えられます。

本像の巻髪のつくりや、顔の向き、手の構え方、^{くん}裙・腰布の形状は、運慶の父・康慶によって1160年代頃に制作された可能性が指摘されている香川・^{よだじ}興田寺不動明王像によく似ています。興田寺像と似た特徴を持つ作例はほとんどなく、もしかすると本像も慶派仏師が制作にかかわったのかもしれません。

なお、台座と両脇侍は後補ですが、台座背面に「普賢院 文禄三年 三月大吉日」という銘文(図5)があり、文禄3年(1594)には普賢院に安置されていたことが判明します。普賢院は石山寺の密教化に深くかわり、石山寺の祖師として崇敬されている淳祐の住房で、残念ながら現存しません。いつ退転したのかなど詳細は不明でしたが、この銘文から普賢院が文禄3年時点では存続していた可能性が高いことがわかり、本像は、淳祐ゆかりの普賢院伝来の仏像としても貴重な作例です。



【図4】不動明王立像 鎌倉時代 石山寺蔵



【図5】同台座背面

特集展示「源氏物語と大江」もお見逃しなく！

石山寺は、国宝や重要文化財を多数所蔵する大寺院で、調査や研究は絶えず行われてきました。それでもなお、石山寺はとても奥が深く、解明されていないことがたくさんあるということを、本展の準備を進める中で痛感させられました。本展を通して、その奥深さと多彩な魅力をより多くの方に知っていただけたら幸いです。

また、石山寺の『源氏物語』や紫式部にかかわる作品は、同時開催中の特集展示『源氏物語と大江』で展示しています。そちらもあわせて、ぜひご覧ください。

(学芸員 柘植健生)

源氏供養と石山寺 —『源氏物語』の聖地化—

いよいよ物語も後半に差し掛かった大河ドラマ「光る君へ」。ご覧になっている方も多いかと存じます。当館で年明けから開催中の特集展示「源氏物語と大津」も4期が終わろうとし、こちらも終盤へと突入していきます。

さて、紫式部は『源氏物語』を書いたことで著名ですが、実はそれが原因で地獄に堕ちたとする説が、平安時代末頃から広まります。そして、地獄に堕ちた紫式部を供養する法要「源氏供養」が行われるようになりました。その後、源氏供養は石山寺を中心に行われるようになり、それが石山寺の『源氏物語』の聖地化へとつながっていきました。ここでは簡単にですがそれについてみていきたいと思います。

地獄に堕ちた紫式部

紫式部(973頃～1014頃、諸説あり)は『源氏物語』の作者として知られ、彼女の書いた物語はいまや世界中で翻訳される大ベストセラーとなりました。その評価は彼女の在世時から高かったようで、多くの人々が彼女の書いた物語を愛読していました。しまいには、「源氏見ざる歌よみは遺恨事也(『源氏物語』を読んでいない歌人はとても残念である)」(『六百番歌合』)と評価されるほどでした。

しかし、そのあまりの熱狂ぶりから、それを批判する考えも起こりました。平安時代の終わり頃、主に仏教の立場から紫式部と『源氏物語』を批判する動きが起こります。

仏教には「戒律」という守るべき決まり事が定められています。その代表的なもの5つは以下の通りです。

- 不殺生戒 ふ せつしょうかい 生き物を故意に殺してはならない
- 不偷盗戒 ふ ちゅうとうかい 他人のものを盗んではならない
- 不邪淫戒 ふ じゃいんかい 不道德な性行為を行ってはいけない
- 不妄語戒 ふ まうごかい 嘘をついてはいけない
- 不飲酒戒 ふ いんしゅかい 酒を飲んではいけない

紫式部の書いた『源氏物語』は、貴族の恋愛話を書いた架空の物語とされたことから、「不邪淫戒」や「不妄語戒」に反するとされました。その結果、紫式部は『源氏物語』を書いたことで戒律に違反したことになり、地獄に堕ちたと考えられるようになりました。このような考え方は当時から広まっていたらしく、平康頼『宝物集』(治承年間(1177～81)頃成立)には以下のように書かれています。

ちかくは、紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとて、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おぼえ給ふらんものを。

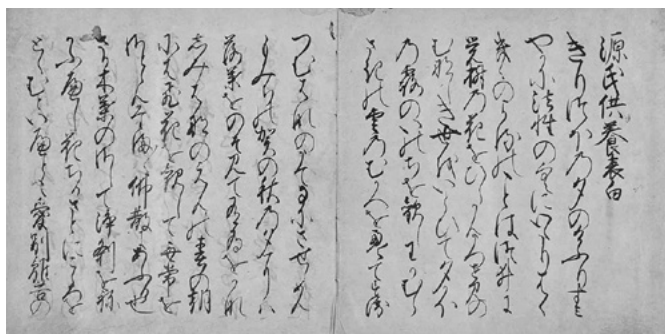
(最近では、紫式部が偽りの言葉で『源氏物語』を書いた罪で地獄に堕ちて大変苦しんでいると、ある人が夢に見たので、歌人達が集まって、終日経典を書いて供養したことが思い起こされる)

このように、物語を書くこと、物語を愛読することが罪になるという考え方は、古くから存在していました。「狂言綺語(きやうげんきご、きやうげんきぎょ)」といい、人々はさまざまな物語を愛読する一方で、罪の意識も感じていました。このようにして、紫式部が『源氏物語』を書いた罪によって地獄に堕ちたという話が広まっていきました。

「源氏供養」による紫式部の救済

『源氏物語』を書いた罪で地獄に堕ちたとされる紫式部ですが、彼女を救済しようとする考えも起こりました。先の『宝物集』では、地獄に堕ちた紫式部を供養するため、歌人たちが終日経典を書き写したと記されています。「源氏供養」の始まりです。最初期の例として、平安時代の末頃に成立したとされる澄憲「源氏一品経表白」^{ちやうけん げん じ いっぽんきやうひやうびやく}があります。それによれば、紫式部を供養するために『法華経』を書写し、見返し絵に源氏絵を描いたことが記されており、当初は経典書写が供養の中心でした。しかしその後、澄憲の息子・聖覚によって作られた「源氏供養表白」(図1)では、様相が一変します。この「源氏供養表白」の特徴は、『源氏物語』の巻名が詠み込まれている点です。

きりつほの夕のけふりすみやかに法性の空にいたり、
は、き、のよるのことはつるに覺樹の花をひらかん



【図1】紙本墨書源氏供養表白 室町時代(16世紀) 石山寺蔵

(中略)かれも夢のうきはしの世也、朝な夕なに来迎引
撰をねがひわたるべし(下線部筆写)

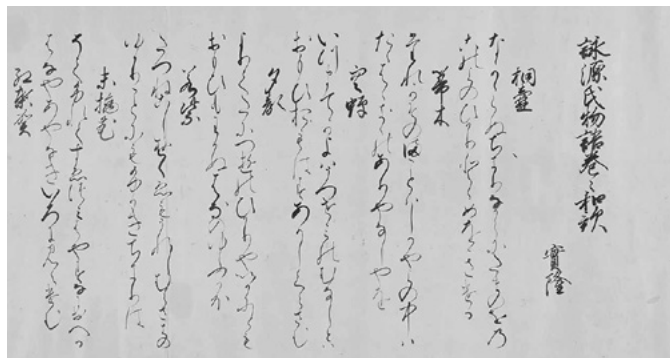
聖覚の「源氏供養表白」は文芸と親近性が高く、後に
能の演目「源氏供養」にもなりました。聖覚以降、源氏
供養の内容がより文芸的な内容に変わっていったと考え
られます。

さんじょうにしきねたか 三条西実隆と石山寺

このように源氏供養は、形を変えて歌人たちを中心に
受け継がれていったものと思われます。それは、『宝物集』
に「歌よみども」が源氏供養を行ったと記されるように、
また、藤原俊成が「源氏見ざる歌よみは遺恨事也」と述べ
たように、『源氏物語』は歌人たちを中心に受容されている
ことがうかがえるからです。

そして、源氏供養を考える上で注目すべき人物として
三条西実隆がいます。実隆は室町時代の公卿で、当代で
も著名な歌人でもあり、また『源氏物語』研究の第一人者
でもありました。彼は「実隆本源氏物語系図」と呼ばれる
『源氏物語』の登場人物を系図でまとめたものを作り、ま
た「細流抄」という『源氏物語』の注釈書を書いたとされ
ます。

その実隆は、石山寺と直接関係が深く、石山寺が『源
氏物語』の聖地(源氏供養の場)となっていくことに大き
く関わっていると考えられます。実隆は明応6年(1497)、
現在石山寺に伝わる重要文化財「石山寺縁起絵巻」巻
4の詞書を執筆していることが彼の日記に記されていま
す。この巻4には紫式部が石山寺に参籠して『源氏物語』
を着想したことが描かれており、その詞書を当代一の
『源氏物語』の大家である実隆が記しているのです。その
後の天文2年(1533)には、『源氏物語』全巻の講義が終
わったことを記念して、55首からなる「詠源氏物語巻々
和歌」(図2)を作り、石山寺に奉納しています。実隆によ
るこの和歌の奉納こそが、源氏供養の新しい形であった



【図2】紙本墨書詠源氏物語巻々和歌
寛文7年(1667)写 石山寺蔵

と思われます。つまり、經典供養が中心だったものが、『源
氏物語』誕生の地である石山寺に、巻名歌に代表される
『源氏物語』に関わる和歌を奉納し、紫式部を供養する法
要へと変わっていったと思われます。

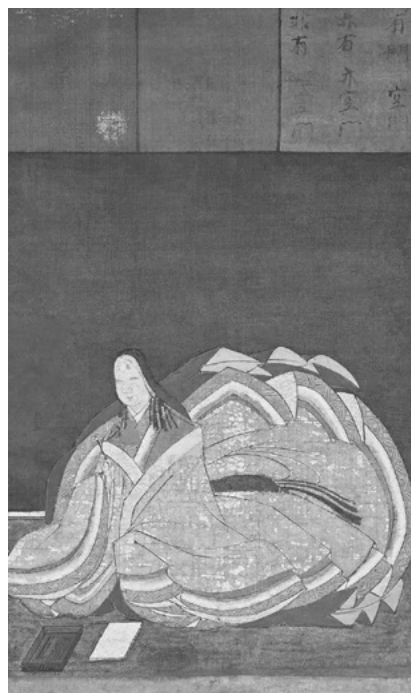
江戸時代に入ると、文化人らが石山寺に参詣し、和歌を
奉納して紫式部を供養するようになりますが、それはこの
実隆の行為がひとつの規範になっていたと考えられます。

『源氏物語』の聖地・石山寺

実隆が「詠源氏物
語巻々和歌」を詠み
石山寺に奉納したと
いう行為は、後世
の文化人らに大きな
影響を与えました。

日政(元政上人)、
きたむら き ぎん やなぎさわのよしさと
北村季吟、柳沢吉里、
れいぜいためむら かものすけため
冷泉為村、鴨祐為、
ほった まさあつ まつだいらさだのぶ
堀田正敦、松平定信

など、著名な文化人
らによって奉納され
た『源氏物語』に関
わる和歌が石山寺
には伝えられていま
す。多くは紫式部に
奉納する旨が記され
ており、源氏供養を
意図していることは
明らかなです。さらに、
石山寺には源氏の
間に実際に掛かって
いた伝狩野孝信筆
紫式部図(図3)を
はじめ数多くの紫
式部の肖像画の他、
鴨祐為作紫式部像



【図3】絹本着色紫式部図
伝狩野孝信筆
桃山時代(17世紀) 石山寺蔵



【図4】木造紫式部像 鴨祐為作
明和元年(1764) 石山寺蔵

(図4)などが伝わりますが、恐らくこれらも源氏供養の
ために制作されたものと考えられます。

このように、石山寺は『源氏物語』誕生の地として、
源氏供養によって多くの人々から信仰を集め、その結果、
『源氏物語』の聖地となっていたのです。

(学芸員 鯨井清隆)

塚四郎旧蔵資料(観光案内・地図等) 明治～昭和(戦前) 96点

当館では、本市にまつわる資料を後世に伝えるため、資料の購入や受贈を行ない、コレクションの充実に努めています。今回は、平成30年度に寄贈を受けた塚四郎^{つかしろう}旧蔵資料をご紹介します。

本資料は、大津市肥前町に住んでいた塚四郎が集めた、観光案内や地図のコレクションです。塚の旧姓は駒井で、大津の米相場師である塚一兵衛(屋号坂田屋)の養子となり、家業を継ぎました。詳しい来歴は不明ですが、明治43年(1910)刊の「滋賀県資産家一覧表」に名前がみえるほか、昭和9年(1934)の「近江蕪村九老画譜」には、九老(紀操亭)の絵の所蔵者として紹介されています。

96点の資料のなかには、関西を中心とした観光案内や、全国各地の市街図が約半数を占めますが、県内の資料に目を向けると、江若鉄道や近江鉄道が発行した観光案内のほか、社寺の案内や大津の市街図など、大正から昭和初期にかけての観光案内が多く含まれています。江若鉄道は、大正10年(1921)に三井寺一坂本間の開通後、昭和6年の浜大津ー近江今津間の全通まで、線路を徐々に伸ばしました。コレクションには、開通当初の大正末から昭和初期の観光案内が含まれ、開通範囲が異なる絵地図を並べると、延伸の様子が視覚的に理解できます。

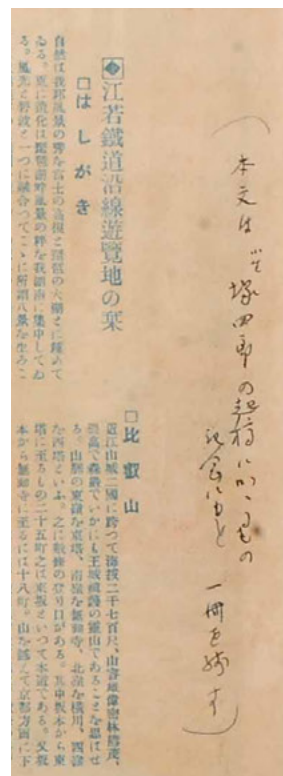
また、この資料の特徴は、観光案内のいくつかに、塚自身の書き込みがあることです。例えば、大正13年頃に発行された「江若鉄道沿線案内」には、「本文は小生塚四郎の起稿にかかるもの 記念にもと一冊を残す」(右写真)とあります。つまり、案内文を執筆したのが塚だということです。また、こうしたメモは他の資料にもあり、塚だけでなく、なかには友人が執筆したというメモも見られます。

大正から昭和初期にかけて、鉄道網の整備とともに

全国的な旅行ブームが訪れ、鉄道会社を中心に観光案内が盛んに作られました。こうした観光案内は、表面に鳥瞰図や路線図が一目でわかる絵地図を配置し、裏面には発行した会社の利用案内(鉄道であれば時刻表や料金)とともに、沿線のみどころを文字で紹介するのが定型です。絵地図については、パノラマ鳥瞰図で有名な吉田初三郎(1884～1955)など、サインから作者がわかりますが、案内文は執筆者の名が書かれることはありません。本業のある塚が、こういった経緯で執筆したのかは、この情報だけではわかりませんが、執筆者が判明することは、当時の観光案内の制作状況がわかる貴重な情報だといえます。

当館では、資料の寄贈の相談があった場合、博物館の収蔵スペースには限りがあることを踏まえて、受け入れる資料について調査し、精査してから必要な資料だけを受け入れるように心がけています。これは、スペースの問題だけでなく、せっかくご寄贈をいただいた資料が活用されないことを避けるためでもあります。本資料については、資料単独で考えれば、大津や滋賀の資料だけが受入対象となるわけですが、塚四郎が案内文の執筆者だと判明することにより、単なる観光案内・地図のコレクションではなく、塚の執筆時の参考資料と評価することもできます。

(副館長 木津勝)



塚四郎旧蔵資料のうち 江若鉄道沿線案内 大正13年～15年(和邇駅まで開通時のもの)